



新編 日本書紀 卷之九





類題發句集冬部

十月



蝶夢編



更衣

のせけや麦薙るる更衣之

一井

まきそん袖と如り衣之元

李下

小春

時雨季のあやしく一日小春は

踏道

てのくは日の初まき小春は

柳妖

昼中より一時さうり小春は

理然

小六月

城のま鏡子出き繁小六月

山衣

夕陽の流るるさや小六月

巻黄



早稲田大学  
文学部図書

雲英末雄  
53-7527

神送

夜去らば一云ぬくのかやと  
馬の鞍が中をわ神送  
取上ふや木風を神送  
目よみぬ連るぬや神送  
ぬもぬぬ雲の去りぬ神送  
留るのるに荒るぬ神送  
神垣の留るたのりぬ神送  
出るるとと戸も去るぬ神送  
神大や採る直るぬ神送  
流るる木の葉も神送

一露  
正秀  
露川  
司鏡  
隆巳  
芭蕉  
凉菖  
孝平  
若斐  
东若

冬一

神の留る

亥の子

去るくと海後重た力子に  
重箱より穀たうぬ亥子に  
お秋とは伏籠より子亥子に  
逢磨忌や梅の腕もつと  
たうゆ忌や柳子よさう輝  
逢磨忌や熟柿も尻のくま  
逢磨忌や海神の悟も  
半うゆ忌や蟹の餅も  
芭蕉忌や先づの係の前  
去くや神意ゆら夜に神に

徐寅  
水  
彦元  
曾良  
乙由  
磯海  
伊  
許虹  
棠故  
史邦  
支考

逢磨忌

芭蕉忌

御影講

此影講や神のまゝ此内已外  
杜も掃も掃りりりりりりり  
荻蕩り為衣付り影御影講  
上人衣敷り為衣付り影御影  
六歌講や儀の紐り扱ふり  
丸かゝり月夜りま十夜り  
扱樂白り月夜り十夜り  
禊の衣皮足袋下十夜り  
鵜取衣立付生衣十夜り  
祖又袋の衣ももま十夜り

芭蕉 治圃 許六 史邦 巳靜 壽仙 浪化 許六 乙由

十夜

蛭子講

元ひは講配者上袴足もよりり  
扱費の房あしりりりりりり  
志取扱小判ちりりりりりり  
蛭子講大黒履もよまりりり  
精選の布袋あ供りりりりり  
扱少半小判も元ひは扱りり  
水湧りりりりりりりりりり  
聖志め衣の身りりりりりり  
神むく山りりりりりりりり  
一月の為果も掃り神むく

芭蕉 其角 比叟 巳雀 鬘水 子那 苑宇 巳雀 條友

神迎

誓文掃  
市取哉

燻用

炉窓や左友死ゆく髪の家  
燻用り庭焚く子たは  
がひまに遠出給へたり  
る野まや漫くつまらる灰の石  
炉開やまかちある電灰  
口切り場お庭そあけり北  
口ぬや今子他り一狐とも  
口ありや禱のまらに縁藤葡  
口切る四月お空法のまひれ  
まかちる火もまらぬ川時雨

色蕉 万平 許六 孟遠 夜錦 色蕉 木守 其角 紀末 毛蕉

初時雨

桑口切

初志り様も小恙とほげと  
考お羽もあつてらぬ神々  
新葉のを根の糸や川時雨  
けららぬ垣の弦目や初志り  
朝日や三粒降くも初時雨  
神々れ跡かま骨のあつら  
新葉の石もまらぬ初時雨  
庭坂より遠くまらぬ初志り  
その末のまらぬ賞んまらぬ  
淋しの葉々んまらぬ神々れ

去来 許六 野放 休斗 西吟 洒也 汎木 乙由 宇中

時雨

相の突れ吹りくく神々れ  
夕暮霞をくくくくくく  
雲くくくくくくくくく  
一時雨をくくくくく  
くくくくくくくくく  
午廻り入り安つくくく  
くくくくくくくくく  
去来のくくくくくく  
一方冬之敷のくくく

希因 柳儿 去来 芭蕉 和及 来山 露沾 去来 文子

冬四

馬より仲の時雨虫けり  
馬あめれ牛あめれ日のゆり  
あめれゆりくくくく  
さ夜をくくくくく  
此の空をくくくく  
くくくくくくく  
麦葉のくくくく  
くくくくくくく  
時雨きやあめれ  
鏡持のくくく

杜園 鶯水 岩紫 北枝 乙抄 李由 け節 子那 正秀

川音時雨  
松風時雨  
志ま記  
初霽

初日ふりくおくる来時雨は  
芋搦り男あやうぬむ時雨  
疎き川持くきかむくはれ  
枯の葉おき方切く時雨は  
屋うらうく疎の時雨おき  
川音おとくは月あき思ひ  
時雨ぬく疎く松風のたて音  
あふれあう雲の馬もや雲も  
危くく傘お直毛志ま記が  
その葉や芋おちるふ渡境

泥足  
風國  
布因  
室瓜  
乙筑  
北達  
水枝  
丈系  
園柄  
支考

冬五

霜

その葉よな後ひの乾や雪の雪  
初霽や麦ゆく去るる表  
初志もや雲より乾疎のこ  
首張葉の表をさうと初霽  
馬鹿自見のつるふりその葉  
つ葉やひひきましくひき葉  
かゝ風や吹浮きひく葉を  
外もや搦抗うく水もさ  
何れもく強良連一枯れ霜  
初霽や搦あれ道は回る川

千川  
北枝  
北坡  
色蕉  
夕北  
支考  
智  
一村  
彦元  
の風

霜柱

雲夜

初雪

雪志しや堀わたりと秋草をみ  
きくく吹ありれ海を電を雲柱  
霜柱を柱に己とくや去る  
霧の中はくまなくや志を柱  
一色もくあくおる柱を夜に  
初雪やと傳ふ事なく雲夜に  
雲の夜や大の字にたぐ様の下  
さ川を雪やとく志す小藤の志  
初雪やと伝ふ事なく雲夜に  
はつひまやと伝ふ事なく雲夜に

近江 若津  
群芳  
上落 圃仙  
林竹  
飛水  
伊豫 向空  
木因  
色蕉

初雪やと伝ふ事なく雲夜に  
さ川を雪やとく志す小藤の志  
はつ雲や枯木の上よと籬やと  
初雪の境ははる飽ふと  
初雪や人の機嫌は初雪や  
さ川を雪やと伝ふ事なく雲夜に  
初雪やと伝ふ事なく雲夜に  
初雪やと伝ふ事なく雲夜に  
さ川を雪やと伝ふ事なく雲夜に  
はつひまやと伝ふ事なく雲夜に

尾山 山川  
尾春  
飛坡  
路通  
文考



まの由紀や横川の秋の三つ二  
初雪か老若の如くあり麦の畝  
は川雪やまきののひる相栄子  
まの由紀やまきのをうけ初雪  
初雪や何れもいづれも吼る大  
初雪も飛石はののきき  
はつ雪の足中やまの老若はら  
まの由紀やまきの畝の愛愛  
初雪かやまきの老若のけ大根  
まの由紀かえくまきの秋の雪

千那 孤登 錦水 許六 斜炭 刺半 藤子 治乙 眞安 眞安 七

初氷

まの由紀やまきの通るは  
まの由紀やまきの秋のつ  
初雪や波のまきの老若上  
はつ雪やまきの老若有合を  
まの由紀やまきの老若は  
開伽柳老若まきの初氷  
孤登のまきの老若は  
まの由紀やまきの初氷  
初雪かやまきの初氷  
初雪かやまきの初氷  
初雪かやまきの初氷

兔士 初石 淡々 花仙 持流 宗瑞 巴静 鳥明 秋死 葉子

鐘

持入るまきの初氷

葉子

冬の月

け木戸や鏡のまはれ冬の月  
相の木老赤くくく冬みく  
雪のつらう月くそさゆれ枝の雪  
ま月や飛合あふ庭園ひ  
ははくくまの男まう通ま冬冬  
まむく氷まま月月の光  
度まあの外うく冬月の月  
青くこの雲まう山ま起まれ  
あま夜ま寝く昼く冬みく  
ま月や紅葉の橋ま我ひり

其角 素淡 秋葉 去芳 毎斛 花黄 橋光 饒夜

冬八

寒

俗うや枕うり波や衣まき起  
塩鯛の歯く起ま起ま笑の棚  
松葉と焚く手拭あかまき  
甲虫と刺し位一おや衣まき  
足明下ゆら向うく起ま起は  
ま起くみ氷鼻たぐくま起  
けまきと後ま起るや夜ま起  
さ起りけ寝うれま起るは  
大起り刺刀のあふま起ま  
葉大根の古く食つくま起

深菟 色蕉 朔春 去来 刺牛 文考 許六 乙物

人亦名夜半はびり敷きく  
 手も出きて机よりふきまきか  
 仗者一人も港へ通敷きく郡  
 鏡あふふき鏡の音あきく  
 物賣の意より申さるる  
 鴨川者一敷はきくはきく  
 心して書万とさく  
 意は程や二階の下は車井戸  
 猫被食干かひひと敷きく  
 雪あまどくかひひと敷きく

種坡 舎野 之角 木等 風國 一 故足 探志 山石 曾良

落葉

苦夏約孔梳のききく  
 山より風吹く通るきく  
 かし鏡の戸より吹あくる寒く  
 起る中口より吹あくる寒く  
 雲底の志れあきく  
 猫や名目の意あきく  
 百子のきく  
 掃あふ牛乳の中は落葉は  
 力方の鏡より吹あくる寒く  
 狼名るる敷きく

角上 点吹 千仙 兔士 哥川 曉巻 芭蕉 如行 巴風 程已

木葉

兼虫の宿ひのまをへるこつ  
振り置くはつとさるる葉  
川より流るる葉事なるは  
我土古葉なるは振る葉  
怖き如依りたきも葉事  
まへて海も折る葉事  
多く折るたるは久くは葉事  
一物能はく折る葉事  
さく水に枝多折る葉事  
古葉事なる花も及ぬ木のこ

玄梅  
牧草  
左靜  
巴靜  
木兒  
後川  
馬次  
夕百  
守武

枯葉  
木枯風

三尺の山も仰ぐ老木のま  
大くは木の葉にあつた  
禁むらとさつりよ葉木葉  
水廻り老葉よ葉付く木葉  
葉事のもくまて葉事木のま  
ちる木葉事申よち折る葉事  
水廻りのちまかく折る葉事  
おりの老葉事なるは海のも  
木枯の一日吹くは折る葉  
木がしり老葉事なるは折る葉

芭蕉  
松風  
文子  
蔓草  
露葉  
相雨  
言水  
涼菴  
芭蕉

おろしや川田の秋老鉄筆水  
 木かぶりや二百の月の吹ち敷  
 風や仲をさしきさ交山老切  
 こがりや花あもるも教もた  
 木のりや杖這へて音もや  
 木枯やつとなく啼り様お  
 おほりや枝の柿老らぬ乳  
 あど木枯より老方の為事と  
 木枯や老この象象もや歳つと  
 おろしや鼻試ぬけ人お  
 性  
 若  
 之  
 角  
 智  
 日  
 子  
 珊  
 楚  
 元  
 子  
 英  
 呂  
 房  
 文  
 考

冬十一

おろしや乙井さるぬ事の中  
 木かぶりや葉ゆふちら牛の角  
 風や或夜ひそくに音を老  
 おろしやはけ先冬月の萩の香  
 木枯や日も思ひもさも吹ち  
 こがりやさるり病も夜も吹  
 木かぶりや花吹うる雲のまさ  
 風やさるりもさるる仲の  
 おろしや流るるあまをさる  
 冬木立や老し山老たも海  
 林  
 乙  
 葉  
 牛  
 角  
 音  
 老  
 香  
 吹  
 思  
 病  
 夜  
 雲  
 吹  
 流  
 山  
 海

性  
 若  
 之  
 角  
 智  
 日  
 子  
 珊  
 楚  
 元  
 子  
 英  
 呂  
 房  
 文  
 考

冬木立

のりかき三井の仁王冬木立  
 冬木立のひびきとて冬木立  
 冬木立の木立乃人賣屋  
 花の末も物のり冬木立  
 深柳若とあされ冬木立  
 狗神の素紙とて冬木立  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮

冬木立  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮

冬十二

冬木立  
枯葉

冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮  
 冬木立の松皮

松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮

枯葉

枯葉

枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮  
 枯葉の松皮

松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮  
 松皮

枯萩  
枯萩  
枯女花  
枯蓮  
枯菊  
枯葛

萩刈りて裏の細き何れへ  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
蓮や萩つるを萩刈りて  
色く萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて

惟然  
新約  
萩風  
一髪  
班象  
秋水  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角

冬

枯考  
枯草  
枯野

萩刈りて裏の細き何れへ  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
蓮や萩つるを萩刈りて  
色く萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて  
萩刈りたるを萩刈りて

為有  
萩風  
刺牛  
去芳  
支考  
智月  
其角  
曲翠  
許六  
牧童

とろくと梅子枝まふ枯野山  
葉積る廣く赤けりし山  
よも出さく物居の山枯野山  
ゆきり枯野山人老吹うれ  
嘆老老よりあふれぬれ  
枯野山自ら山物冬小松野  
とろく草枯野くちりあつて  
吹きけり野自大あかし野系  
念佛のほろりとあふれ枯野山  
よもく水日の山とくうれ山

尚ふ  
末山  
重行  
吾仲  
約壺  
蓮之  
宗瑞  
十磨  
麦水

冬十四

枇杷の花

月之つら去らりぬれ枯野山  
夕の光晴く帰ふうれ野山  
つ川嘆くつ散やんひの山  
ひとのふれもあふぬれ山  
雪の日にあふれや枇杷の山  
冬の白気密よりけりひの山  
山茶花やへもく枯野山  
山茶花やつらよる山  
山茶花や秋の散りてはて山  
何れ木と回まるとけり山

雨竹  
汀雨  
尚ふ  
源亮  
怪松  
曲琴  
白袋  
宋友  
帝太  
末山

茶の花

帰花



春風をよめるや山風の毛氣あり  
つれなき花の影も消えぬ  
かたき花日のあやみと恨あり  
表まきさの秋のあやみと花  
春風よのあやみと恨あり  
表まきさの秋のあやみと花  
春風よのあやみと恨あり  
表まきさの秋のあやみと花  
春風よのあやみと恨あり

明水 怒風 露川 曲翠 乙由 鳥洗 松雪 伊豆 千代 連枝 古佐 彦旌

冬十二

ハツ子花

冬牡丹

水仙

雪の横のうらさや花ハツ子  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹  
花もつと花もつと冬牡丹

尚志 百里 昭囊 大如 千代 貫古 色蕉 高川 一品 斜炭 鳥久

綿木

葉の花

寒菊

の他も三子入丸末の後  
まゝもんもく冬よもれ  
水仙もあまは光るも  
みけりやあまのついで  
綿木や傍り子末のまゝ  
葉のまれをわさく  
葉の花や摘み入丸末  
葉のまや葉のま  
葉のまやまのま  
まのまや粉練のま

風平  
子代  
朱杜  
貞之  
心秀  
出羽 仙  
吳天  
己筑  
芭蕉

つばき花

室屋梅

寒の葉のまゝ静か細うれ  
寒菊の傍もあまや大松  
うん葉や一枝よ見ゆま  
まのまやそのまを  
かん葉やまのまの  
うん葉やまのまの  
河骨のまのまの  
儀の下に葉のまの  
葉のまのまの  
まのまのまの

村江  
許六  
寧院  
長英  
蜂彦  
柳儿  
ゆり  
屋元  
葉人  
室屋

大根引

物豆と並く喰や梅の乳  
常も梅と身と兼て室の中  
難坪より小坊を穿るや大根引  
出女より投く通るや大根引  
小野中居所道へ一抱大根引  
水鼻の流るる川にや大根引  
下うらもそくく飛る大根引  
念佛より力の入るや大根引  
引切くおしと教て大根引  
よのちうは流る根引

百段 志理  
現象  
芭蕉  
許六  
知是  
倫参  
危士  
至川  
秋瓜  
子代

千葉つ

木より一の屋身は穿り約千葉  
一夜くしと動を穿るつる海を  
君見せや我は入るを莖の柳  
州江やおよほ中のはぬ莖の莖  
莖葉よりやんあくあは伴路の出所  
麦耐より狐の尻尻火のけり  
麦耐より一瞬のちむる風  
来りしれや染り穿るるぶら  
静とて数珠を穿る網代寺  
恵の寺よ寺公あせく河の寺

錢正  
探丸  
嵐宮  
芭蕉  
素龍  
出水  
乙由  
隆子  
支那  
支考

網代寺

氷急

あゝ身死まに死つゝはらふ火  
 大の勢や人おき濁り  
 何れりりる流の解と  
 穉元子月を絶つて  
 夜の雨仕合ふ  
 柳の風をひそく  
 雲の夜を女支那  
 簾笠をくひ  
 氷とれお重と化を  
 月うけおをてけて

友元 言水 許六 牧老 穀石 木兒 文石 園更 宗鑑 松生

染漬

たつへ  
 千尋

ゆづ漬や夕日おぬく急の歌  
 染漬や浪りたふゆる急の  
 敷あつる柿き仲老ふ山  
 あゝ磯やけしと別れ  
 夕紅お月り糸色や村  
 海風やおのれ  
 夕紅お月り糸色や村  
 夕紅お月り糸色や村  
 夕紅お月り糸色や村  
 夕紅お月り糸色や村  
 夕紅お月り糸色や村

如堂 卯七 綿守 去来 之南 曾良 和及 山夕 文章

鳴 鳧

水風鳥まじりぬ千鳥の夜夜  
 立ちあがり浮桶ひのちりり  
 夜あがりも千鳥もあはれぬ  
 一羽つゝ清りさるゝとて  
 毛衣しはみくぬく物  
 鈴鳧のあやうき  
 水鳥のあやうき  
 鴨のあやうき  
 赤入るは枝

乙兒 李更 乙峯 仙雲 雲昆 芭蕉 鳧雲 丈草 朱拙 北枝

つれづれと雪ふりぬく鳴き  
 出づるは常しき鳴き  
 鳴きしは常しき鳴き  
 立ちあがり清りさるゝとて  
 一羽つゝ清りさるゝとて  
 吹きまてぬく鳴き  
 管舟のあやうき  
 大浪のあやうき  
 一人のあやうき  
 冬枯るは枝

千那 如賤 山隈 雨亭 巴静 乙由 希因 貫吉

何れも  
鶯

外梅や秋明の危の度歌音  
あま越も八江の水乃もも  
後のく川人下り見せも此の鶯  
杉名や名残屋敷よちて鶯  
鶯鶯名もあま重砂よはり  
押名や水のこころこころ  
杉馬や波濤くも名の上  
鶯鶯名もあま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり

水馬

描 那上  
馬吹  
野水  
杉名  
馬光  
休遊  
素丸  
李由  
鶯界  
冬二十

木兔

水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり  
水乃や名残あま重砂よはり

免黄  
乙女  
休遊  
素丸  
李由  
鶯界  
春路  
那明  
月琴  
紅棧  
素丸

竹鶴

愛り啼き見せりみまの  
晩方若くや輝き交り  
つゝ菜の氣と匂の竹鶴  
影に成るとも小鳥やそよの  
鳥の居る庭うらまへし鶴鶴  
夜は自らも集ふや竹鶴  
船起る火打は花やみまの  
とてしる舞子我かくや鶴鶴  
冷ふ事あるとて経つ大焚火  
あともなく愛れ子よ何くせん

大焚火  
愛れ子

許六  
性成  
山  
風國  
信若  
咲葉  
鹿元  
若維  
涼菖  
坐落

卷廿一

夜興引

まき鳴や琴弾おふ敷若も  
ほろり風夜興の大いさゆひ  
秋真引や流るる舞子  
夜興引若くはあはれ月  
尾歌の四月とれ文生海流が  
生かすひひりり水歌あまに  
うらみと海月と神さな海  
お波りり方故まゝもさかま  
お系よ吹とれり海參りれ  
菟野の南越りりと海流が

生海流

桂川  
氷花  
春波  
風付  
去来  
芭蕉  
車着  
如行  
大次

鐘

河豚

中海流に夜ぬくや音を聞  
及びりまゝのへんや中海流に  
市へ出くはる日のきんぬたに  
入るおのちるまゝておる海流に  
鐘舟や比良のりおる雪舟に  
名お事て葉茂くおる鐘の枝  
ゆくとくや網もまのまを分り  
河豚汁はゆかばあつたれ  
ゆ汁やゆかばあつたれ  
飯煮の徳合より命の那

赤川 利登 春波 山李 李由 狸尻 芭蕉 左角 永吟

冬九二

納豆汁

芹焼

飯汁や吟ぬたはけりふた葉  
盗人よりおひともまん飯の湯  
ゆくとくや一葉へくく種を  
ひらふふ葉末あまゆくと汁  
みふゆくと種く二人や河豚汁  
河豚汁あつたあつたれ  
ゆくとく古ゆきむ交納豆の形  
納豆やたつたあつたれ蓮の糸  
駄立のゆくとゆくとあつたれ  
芹焼や縁ゆき田井の氷

一洞 去来 危士 傑者 麦士 布舟 幸平 浮舟 笈推 芭蕉



措

措の火や暖うる者已六尺  
深この火や暖は啼たり或  
措は火に照る色もかりり  
河この火より親子是より以て  
炭竈と云ふは煙を吐けし  
炭の向や雪はようと立ちあり  
すゝ竈や麻のふく者よりあり  
炭の向や日や忽ちと炊者上  
炭焼や鏡や水泉と云ふ  
そを焼も思ふは老のふくはれ

丈季 高川 捺志 去来 不炊 巴人 瓦律 壬角 涓捨

冬七三

炭竈

炭焼

炭

炭焼や焼ぬむの雪裏枝  
花も紅はれありはる炭俵  
語らたはてはるや炭を  
ふ炭ありは焼るをいひ  
うと炭もその木葉よりあり  
山の中おひの山をわたり  
く地をたわたり居たり  
炭よりや已の焚くを焚く  
何事とも入るはとて強ひて  
かろきとて忘るはあり

忠知 任口 仰和 醍非 其角 南休 可全 晋江 小春 飛水

衾

炭費

紙子

初雪の工丈よ志の志合ふれ  
息也れ新なりき架紙分家  
猫の手てきりいふ紙合の那  
ちり藤やたむもかひ紙合  
のしよ女よか引り紙子れ  
定體よ食さるゆる書子れ  
南よりさつる書紙紙子れ  
た兒計りく書人よ中ふ書子れ  
兔岡武襟下紙りかこりれ  
松風下あそひ色しる紙子れ

枕妖  
兔素  
雪  
餅  
立  
木導  
色蕉  
高川  
涼菴

冬北四

蒲葦

足袋

紙帽子

取巾

有程の伴連仕盡して紙子れ  
息災よ先ある紙子れ  
下に居るも書紙りくも紙子れ  
毛ゆんや怖い後見の侍  
度つや大燈為志のさ先の中  
草足袋のむしあお系蹄か  
髪り居る書つりて紙帽子  
初雪の紙合もさく取巾れ  
用のおれ身あけく取巾れ  
彈きし紙合もさく取巾れ

その  
素丸  
玄武  
涼菴  
冬角  
一袋  
素因  
毛紙  
玄芳  
木導

湯婆

埋火

色く此改中の上てや丸歌中  
朝夕中夜産息もほり改中  
ちつちよはゆふ交重たつまふ  
清奇うらなまきく喉て頭中  
湯婆うらぬの些きくれまふ  
踏れもかきかきぬ湯婆  
うら火や燈火のあき影法師  
埋火や蔭園と通支葉の白  
うら火や吹耳のうら風  
埋火より去る力もく白ひく

物非 素丸 也有 一幹 涼莞 佳木 芭蕉 許六 百里 神叔

冬北五

火鉢

火桶

埋火や雪の巻哉とあまひら  
うら火や灯のあき影法師  
うら火や吹耳のうら風  
今ひひの吹耳のうら火鉢  
あきら右やあきら火鉢も夜まの伽  
脈足人指引のうら火鉢  
おあき出進さびさる火鉢  
火桶抱く願脚をかく  
瓢箪のうらけ抱く火桶  
のあき舟をかく火桶

宗陽 巳人 風後 傾水 秋色 吏明 他若知 踏通 陽和 吟下

冬後

火燧

ほしくと船りさし古き火燧は  
何つと又松のたしるや巨火燧  
つりし物とまきさきと海火燧は  
おがよおしハ高き巨燧は  
白松のまきへうと船りさし  
扇より少くと文系火燧は  
足しは火燧即ち巨燧は  
船おがたさきとあさ火燧は  
洋の船中ひひく火燧は  
おがよおしとつりさし火燧は

文字  
芭蕉  
字  
猿  
魚  
日  
野  
棠  
落  
梧  
表  
波  
左  
辭

冬廿六

冬巻

極よへ足さし佐後の古き巨燧は  
姑老おしとゆめと地おしと  
佛ありとちかきと火燧は  
金屏老松の古しと冬あり  
冬巻はとちかきと火燧は  
おくしとゆめと火燧は  
人おしと息を忍ん冬あり  
唇おしと息を忍ん冬あり  
汁溜の流るしと冬あり  
はしくとゆめと火燧は

玉  
葉  
守  
捨  
陸  
史  
芭  
蕉  
、  
、  
千  
那  
涼  
菫  
、  
、  
を  
角

腰たぐ交むりし信子や冬籠  
 冬ありぬ巻の物よの巻うれ  
 狭きも我もまゝいり冬あり  
 冬あり巻鞆の筒の埃の那  
 ぬきまゝの夜屋木のあし  
 焼もろこゝろく丸く冬あり  
 冬籠揺りこす木の麻に  
 下帯あきすまけつゝゆゆ籠  
 夜帯につらり虫湯や冬籠  
 夏まゝ入字の山道や冬籠

去芳 高川 正秀 木守 枚風 野坡 彫棠 木節 呂物 温故

冬七七

冬搦

尻笥り檜掛の皮や冬あり  
 有風呂や巻まゝく此冬かま  
 落の棠その根抱きけ冬かま  
 一村冬敷りあし野や冬搦  
 山道あきまゝいり冬冬冬  
 味うまゝ換櫃や出りあし冬  
 冬かまへつゝ棠のうれ冬まゝ  
 勢あきまゝさつり北の定  
 内ふり杖まゝたく雪の垣  
 雪うれや巻へ巻れ中と巻り

篠爰 信徳 其角 野坡 汎舟 和及 野水 伊 烟色 東向 了歌

小窓  
雪垣

雪等

つくろひのちねはくしき老等  
棹立く哉の海音やむいづく

涼菫  
正秀

十一月

冬至

正の昼短乃夜長乾終至也  
雪の寒吹り向ふ冬玉氣

乙州

曆費

月以老切と志り曆より  
曆よりを食は彼者同いり

伊豆  
如髮  
身角

芝松歌也

顔尺也や曉いさむ下邸の櫓  
白尺せも雪下過く冬は寒し

其角  
汎木

冬九八

髪置

髪置や子細く撫ふ親心  
髪置や枕の世話の又あはれ

其角  
松岡

淨火焼

浄火焼の多物あはれ村の次  
浄火より吹草祭のそと一衆

智月  
李由

子祭

子祭や我が歌ある氣も  
子祭や焼く妻の吹れり

雲麻  
繁雲

淨神樂

浄神樂や鼻息ふま面終完  
浄神樂や火を焚唄士はあはれ

其角  
玄来

里神楽

里神樂や押めくひる歌節の霜  
里神樂は松子と尺は里神樂

篠爰  
曾良

空也忌  
津敵

大原禱  
御佛事

誰と誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰  
空也忌也宜也方より確也  
その吉也 瓢字んをに味た  
今おのりもあつて  
今多めく加茂川吉く津多  
約豆切る言志を  
孫多晴はあつてあつて津敵  
とてふく川破を  
候は此の物とあつて大沙禱  
古佛事や是も他力の加豆汁

其角  
表字  
去来  
凡言  
之角  
色道  
候道  
免士  
句空  
書平

冬九九

雪

此の事や牛盛人も并み出  
いさしたる言んは精不所ま  
市入りいへは是うん雪の登  
る我々泳ふ言も名物うれ  
恐くといへたくや雪の門  
ふおの何名もやう雪も  
人我とあつていへん雪の登  
系雪とあつていへん雪の登  
い名言のいへん雪の登  
と念のいへん雪の登

出  
一乃  
是  
、  
、  
去来  
免  
湖春  
千角  
凡言  
本由

窮年暮景 臨冬 暮 一 夜の雪  
那も 心も 雪も 心も 何は 何は  
長く 川一 水も や 雪も 雪も  
名も や 水も 水も 水も 水も  
月も 水も 水も 水も 水も  
雪の 水も 水も 水も 水も  
傘も 水も 水も 水も 水も  
雪も 水も 水も 水も 水も  
大雪や 水も 水も 水も 水も  
雪も 水も 水も 水も 水も

支考  
支考  
一品  
汶村  
北枝  
若角  
浪化  
介我

雪も 水も 水も 水も 水も  
夜の 雪も 水も 水も 水も  
尾も 水も 水も 水も 水も  
六条 水も 水も 水も 水も  
雪道 水も 水も 水も 水も  
我子 水も 水も 水も 水も  
我子 水も 水も 水も 水も  
帆板 水も 水も 水も 水も  
雪の 水も 水も 水も 水も  
雪一 水も 水も 水も 水も

治徳  
全毛  
四睡  
吾仲  
孤衾  
こ先  
藤号  
沈足  
此筋  
去芳



雪砾  
雪粘

何のりし破れぬ為り雪の雪  
薄の雪の雪の雪の雪の雪  
清くもあめりてせめて雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪

雪朱  
乞食  
杜菱  
貴古  
孫子  
芭蕉  
涼菖  
羽衣  
雪路  
雪路  
冬世一

雪佛  
雪兔  
吹雪

見よ事大なるなりぬ雪あり  
佛の雪の雪の雪の雪の雪  
秋の雪の雪の雪の雪の雪  
接る方り獲りて雪の雪の雪  
海山の雪の雪の雪の雪の雪  
月夜も雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪  
雪の雪の雪の雪の雪の雪

布衣  
一井  
羽衣  
沂風  
乙妙  
李由  
秋之坊  
史邦  
素鏡  
任之

みぞれ

一吹雪やりさしき架るのけ  
松抄りさしけり敷みそり  
佛さの初めけて誰そそり  
川哉の禪を志ほふ又世り  
まの危哉引さつてけり  
いりまきあもこの松木笠  
はらまき月取あも敷り  
驚か危のさつてあれり  
柿の葉さつりあも敷り  
はくぬ敷やや小浪中を

歌水  
去来  
文章  
毛氈  
篠炭  
芭蕉  
杜國  
耕雲  
卯七  
之角

冬三

霰

氷櫃

靉々としてけりけり  
ふ下衣根りあも敷り  
夜あつて中てかき敷り  
冬もさぬしあも敷り  
石の葉もあも敷り  
飛りあふ所あも敷り  
さちあつて何そあも敷り  
井のふりあも敷り  
海木りあも敷り  
はらあつてあも敷り

光雪  
与考  
高川  
木岡  
芝花  
世坂  
夜舟  
免黄  
麻父  
胡周

下

凍氷

氷結つて月影さめつらば  
凍つけた凍つたなう無の凡  
田氷氷の有るけ氷氷釣くれ  
とりくると氷のらまは小舟の舟  
艇破る夜の氷氷結き氷くれ  
あふ木の氷氷やわら氷く  
さうつ氷く我と碎ふ氷くれ  
魚の釣釣めやる氷氷釣くれ  
枯草氷氷かやうて氷く  
氷くけさる氷氷く氷くれ

氷羽 秋坊 凡兆 清門 芭蕉 不角 正秀 探丸 小枝 林崎

冬世三

冬至栞

槿の花  
太山松  
葱

く氷氷打目のまき氷氷ゆが  
あはれ舟の投ふ氷の那  
みきけは氷氷をり投釣ぬくれ  
荒行名氷釣ぬく氷氷の舟  
舟のの氷氷氷氷氷氷氷  
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
月影氷氷槿の花ちま氷氷と  
世氷氷舟の舟太山松くれ  
ひより舟氷氷舟の舟の舟

氷羽 超波 箕蓋 麦由 秋水 乙州 兔士 四國 坡雲 帆市

人參引  
生姜垣  
雷海苔

味不毒熱子強も葱の白くれ  
葱結しあや傾地所の夕河に  
朝鮮書名書や引らん人參  
孔子の白その皮へあらせき  
海苔の名や書くも人參と  
黒海苔や我衣のよま汁  
死まなく標かきうん鷹の敷  
取まなくおらた鷹の衣居れ  
たうその枯那よまは元那  
いささ川鷹引は山家あり

厚為  
壁麦  
其南  
名結  
文字  
所之  
景東  
子英  
文字  
中圃

冬四

鷹

鷹狩  
暖号  
力車  
菓子

鷹狩目りなき山家のつりり  
物衣者神鏡とれや雪の鷹  
たうかりや侍殿者衣兼と並  
麦之白者洞とあるは鷹狩り  
鷹のりや物書しんをといふあり  
子子个物の仕やうやぬ先号  
太儀のりゆき好きあかやり  
暖号麦乃く敷や暖と標  
枯しとも志くや鷹の力なき

素心  
支考  
知七  
化老雲  
麦水  
後吾  
及系  
文曉  
南水

練実

初練

乾麩

いさ

練つく男と女とを練る

七海カキ入る馬とく練る

七海カキ入る馬とく練る

初練や海に志る大江山

加さけや死する時老いのあま

干飯や割木と折れぬあま

うらさけや二本の馬とく青

加はきや山家とく石とく山

干練や既下枯木と花老味

八系成事と一口のいさうれ

万平

忍戸

忍戸

孝友

害友

近之

万平

等廻

丸枝

日良

冬成

牡蠣

杜支巻

薬食

とも陰子ゆり付る薬竊巻

柄起すや我少く人々ぬあ鏡

路りゆり起すかあひひのあ

かゆ川や後成巻く誰あ水

杜支巻か巻拾ふよりあ巻

かへり又相させく薬食

端ひ川持しゆりまやまら巻

葉のひき水と檀那まらり巻

獲鼓の川や狸巻くまら巻

巻巻

真角

丸巻

杜假

立吟

反考

釋櫻

菓雀

凍荒

葉舟

玉子酒  
生姜酒  
茗羹酒  
あうり  
柔わけ  
氷菓

美らひ翁とらりあひ女うれ  
あや甘海もたやあや薬巻  
於座まら入り喰ちん重き鳥  
少少と日る者やう勢卵ほ  
多あ中名樂者他あや生姜酒  
御焚く夜あ空何んそこ酒は  
あうりや何れも此の旅を  
何うもや雪踏よよみ野あに  
梅枝おち多あ柔わけも芳地  
海や押多あいふ措の上よ

丹後 舟園  
也 有  
魁 海  
松 葉  
蘇 後  
幻 叶  
氷 花  
碧 葉  
山 川  
似 多 葉

冬世六

雷巻  
換  
雪車

雷巻や日あよん此は於ち  
かやまの房あま重た夕日れ  
あうりといきあよあうりあうり  
雪舟引や休むも直よまて雪

青 寄  
東 陌  
荷 子  
龜 洞

十二月

乙子節日  
正月事始  
臘八

長孝のよとあよこ子の祝ひは  
事始まらぬ物う事う  
雪も敷りまよら事う先  
臘八や渡あ御下りあう

毛 苑  
尚 白  
可 磨  
友 考

臘ハや後をさらした物其汁  
 臘ハや今胡雜炊者其味  
 臘ハや少少少走八日の走き也  
 臘ハやハ飯の薪も山越也  
 臘ハや甘免く火燒の山を笑  
 臘ハや粥老中少少穿の教  
 臘ハや傳守眼老老其心  
 臘ハや膏のゆり無迷ハ相  
 佛名の礼を授く心數也  
 仏名や菓好飲何望もたらぬ  
 許六  
 特殊  
 枚瓦  
 乙由  
 采芝  
 六積  
 大睡  
 既心  
 野水  
 酒中  
 冬七

仏名會

寒只  
 寒垢離  
 寒の月  
 老らくの日少をまくし此佛名  
 佛名や飛りろ夫後の身  
 月心の為り針立ん寒の入  
 寒よ入心は釋一夜其の禪  
 夜鉢も空也の獲も寒也  
 夜鉢の解胃也つときよ寒也  
 寒あり此進へくりや其あり  
 寒垢離の机も少く衣きと  
 寒ここの外少たる少少也  
 寒垢離り田雲の心の机也  
 太来  
 吾其  
 色蕉  
 鼻袋  
 芭蕉  
 千川  
 取具  
 踏通  
 菓花  
 免士  
 冬七

寒只

寒の月

寒垢離

寒念佛

寒垢籠や夏の露も衣也  
酒飯の飲酒もいづに寒念佛  
おれおれ証木の御心念仏  
わうも身孤ちの如し寒念佛  
おれより夜念の如くおれ念佛  
いささく秋もく尾の寒念佛  
寒念の極あり寒念仏  
寒念の極あり寒念仏  
おれ寒もいかに涙も証の如  
寒念を引つる松老の如く

安里  
其角  
文秀  
了耳  
甚悦  
文秀  
存夏  
素丸  
風後  
李由

冬廿八

寒聲

寒おや南大門老の如月  
旅人の寒もあつとや勢多の橋  
寒おや凡ちの如く人老不  
寒聲や戻りにてさう草の如  
寒声も暮れにきて仕舞り  
寒聲や松子よのりて院様  
寒おやささしく老も又太郎  
寒代も音ひらりや寒造  
確も雪の如くや寒つり

七角  
松妖  
幸佐  
寒河  
許六  
咲梨  
丸七  
史邦  
波那

寒晒

寒造



寒の水

汲るへくいづくふきや重しの水  
物白濁くくを花さくく重しの水

浮休

鷄文

白の陰は鷄ばらむ日南くれ  
かきたや松もいひ川原のよら

伊賀 鷄叟

鶴葉

赤いまをく重しの水と園児が  
云見まし妹つくらひぬこへの川

伊賀 鶴葉

園児

張るへくく重しの水と園児が  
衣配りや西へ色試すくち亀

伊賀 園児

札池

衣配りや西へ色試すくち亀  
又策のま川挿換見る衣配り

伊賀 札池

衣配

又策のま川挿換見る衣配り

伊賀 衣配

冬世九

年貢

姉妹、もろく色や衣くもら  
解のよ試さくくく重しの水と  
裁肩あ末の子ら、川原もら

尾張 年貢

節分

節分あ我まといりあの子ら  
昔分や外も敷のまど川

尾張 節分

年越

年越やあま名屋の焼くまど  
少も色てあまらと敷も乳

尾張 年越

寝床

須戸の石見女床公や寝あぬ  
寝床一夜りあまらと敷も乳

上野 寝床

秋毫

寄葉へ若白あち〜寛永

伊勢

素因

厄拂

今切らと手そりなり厄拂

西艦

幅幅のぬれ〜ちり厄を以

素因

豆打

豆と〜川あれ中ちれ笑うれ

牛角

豆とりて家も公中元う〜ん

北坡

終夜

刺の終夜〜さう〜に荒味か

況言

終を〜んや築地ちん前まで

蟹爰

終夜か〜〜や刺の角大伴

也育

觸改次

月迄の果や終り赤い〜

柳花

年丙亥春

年丙亥〜〜吉起美の日記は

雪吟

冬四十

年木樵

連寄の去ま〜ん冬の表

新六

年木樵あ〜〜うぬ〜や年終

了ん

〜〜の舞お〜〜のち

先士

年木樵〜〜極〜〜

午代

日如〜〜も〜〜り年木樵

金冠

年木樵の木お〜の鬼うれ

玉尾

年木樵や田畑表〜〜る〜

芭蕉

年木樵の石〜〜雪の上

孝由

年木樵不勃〜〜る眼〜

瓦葺

年木樵

木尊

煉拂

何方よりく托らんき掃  
 きて掃や二階を下と皮箆  
 う鍾もきく掃きう掃拂  
 煤掃く何やたるま家の内  
 煤拂ひ焼あうく集り架  
 きて掃や何哉一も掃きま  
 扱く扱け盡せぬ者の掃き  
 大馬丸日南不あやき掃  
 煤掃や俄りゆらゆの月  
 きて掃や墓よりうたう小墓

奉公  
 平環  
 雷笠  
 月下  
 樹松  
 支考  
 尚公  
 乙由  
 可風  
 吹亭

年四十一

餅搗  
 正月の餅搗きや火とくまの男郎を  
 餅つまや芥のきま敷谷のき  
 餅心や葉の目かきりーの心  
 りち花の後あ焼けて教は  
 子座の二の葉や青柳一り  
 節季の花の笑ふ出立るれ  
 目よかた赤赤葉まぬその葉

遠蒸  
 許六  
 袋水  
 吾仲  
 の風  
 走角  
 飛水  
 玄来  
 色蒸  
 一洞

餅花  
 青延  
 節季

姥等

節季のや白くし来く方々  
きれたり又申起へ交事は  
氣下りむる時と有へし  
節季依の梅子とぬる  
良季のくはれ山姥の子孫  
節季の梅の道に遠入  
世に下り向う来とくれ  
良季のくはれ山姥の  
姥等とく節季のくはれ  
は法事起るる如く

伊賀 免責  
東山 頼珠  
松後 先士  
伊賀 蓮之  
田平 武  
古田 京  
仙行 冬四十二

身市

此の市線番賞は出とれ  
あけのへたたも山姥の市の  
神もさくや身市番者  
福あつる心也きく年市  
喧嘩する俣多羽り如くの市  
山姥の物一ありし市  
節季の梅子板賣の詞り  
是とて身市板賣の端り

色蕉 骨  
志末 牧  
立志 骨  
信徳 宇  
宇電

種長賣

山里の山姥はさく種長賣

可風

柴井 葵  
 松 葵  
 古曆  
 年忘  
 多の尾と踏ちまうれば多木葵  
 松 葵 や 大系あまうれば詞つれ  
 我 庭 冬 松 葵 又 立 冬 葵  
 古 曆 何 處 へ 入 ち ぬ 葵  
 歩 止 ぬ 未 前 の 鐘 ね ぬ 葵  
 埃 とも にくく 色 け 曆 う 乳  
 此 一 忘 ぬ 葵 垣 際 一 七 詞 づ け  
 廿 八 日 以 て 多 忘 ぬ 葵 接 接 ぬ 乳  
 冬 日 止 ぬ 葵 子 松 大 名 花 女 人  
 冬 一 忘 ぬ 葵 等 一 詞 づ け ぬ 乳

高川  
 素心  
 周舟  
 先雪  
 阿音  
 北水  
 舟去  
 色蕉  
 酒堂  
 葵丸  
 冬四十三

寒 葵  
 早 咲 梅  
 臘 葵  
 此 一 忘 ぬ 葵 づ け ぬ 乳  
 多 忘 ぬ 葵 如 堂 葵 葵 づ け ぬ 乳  
 寒 梅 や 冬 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳  
 力 つ ぬ 葵 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳  
 後 念 の 傍 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳  
 多 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳 葵 づ け ぬ 乳  
 冬 葵 の 葵 づ け ぬ 乳 葵 づ け ぬ 乳  
 冬 葵 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳  
 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳 葵 づ け ぬ 乳  
 臘 葵 一 忘 ぬ 葵 葵 づ け ぬ 乳

松舟  
 因之  
 止弦  
 愕然  
 露沾  
 此通  
 去芳  
 东羽  
 松南  
 霜  
 心  
 心  
 心

子笑様

火のつらき日よあつた冬つて  
冬は冷やまよ笑り冬は笑  
くはきりれをよつちや冬椿  
山部の兄弟に些少の沙を  
何よりけ沙走の中より  
世の中無獨うとの際走は  
雪隠よりひかきぬる沙走は  
侍妻や机よりそりふ書の小口  
侍春や氷より満ちぬる芥  
雲下川や雪の子がねるや

一笑  
近  
飛末

若木  
元聖  
芭蕉  
如行  
老士  
浪化  
智月  
可風

冬四十四

師走

春と侍

春迎交

年々暮

春ちり起三多味唱の兄弟は  
春ちりく梅後うらふ菜畑が  
乃のりれ書きへり起ま冬のもく  
子哉おこし山なきを年の暮  
やる人の数もへん老のりれ  
絵かきいさ敷甲斐あは冬暮  
すたまや女の目鏡やうの暮  
かねくしやういさの案ずりれ  
我虫くよ免ぬ物あらうの暮  
祖父や山邊は波瀬と年々暮

李白  
毫洞  
希矩  
其角  
芭蕉  
信徳  
踏道  
尚公  
木因

行年

冬のくれあはれは是れ其の公を  
瑞蓋のけしきとて年の暮  
朝一とて今も数へは多かれ  
お世も暮もまことなりけり  
事多きくはくきとて  
追憶も少く悔もあはれ  
月出たきたは涙もあはれ  
いともやあはれとて  
行年や登りし初は  
い多き秋は

月下  
孤燈  
智月  
秋風  
露川  
丈草  
蓮之  
湖春  
其角  
休山  
冬四

大世日

いともやあはれとて  
折く年よ暮の初や  
多きいさよ  
いともやあはれとて  
いともやあはれとて  
大三十日き  
夏の夜や  
大いともや

雲鼓  
去来  
汎水  
風玉  
許六  
寢院  
希周  
西鶴  
太来  
楚舟

多筆

大々々や秋子儀中居き一為心  
大々々や子のをりしる人知  
此中より聖元日そ持し  
瓜とて心やけやや一筆  
と一筆木のりけ新名所木一

一万字  
羽取  
更登  
系毫  
利合





